

篠路歌舞伎の歴史と現在

篠路歌舞伎保存会 会長 おおたか ひでお 大高 英男

【篠路歌舞伎について】

明治35年4月、篠路村^{れつれっぽ}烈々布移住者の中の青年たちによって「烈々布素人芝居」が烈々布神社に奉納されました。これが昭和40年以降「篠路歌舞伎」と呼ばれるようになった芝居の初演です。

北海道の開拓が始まり、本格的な篠路村への移住が始まったのは明治中期のことでした。入植した移民による開拓は厳しい自然災害との闘いであり、大洪水や冷害などが与えた被害は移民たちに厳しい生活を強いました。明治29年と31年の石狩川の大洪水による被害は甚大で、多くの離村者を出しました。離村者の増加による人口減少は部落の存亡を左右する切迫した事情にありました。

こうした生活状況を背景に、青年たちはお互いの力を出し合う場を求め、また、心のよりどころを求めようになりました。

青年たちは明治31年8月に青年会組織「若連中」を組織しました。この青年たちが中心となって、同年9月に「烈々布神社」を創建しました。そして、青年たちの中から神社の祭典の余興として「芝居」を奉納しようという声があがりました。

その当時、若連中の青年たちに芝居を指導していたのが「大沼三四郎」です。大沼は、この地で本格的な歌舞伎を公演したいという情熱を持って臨んでいました。

大沼三四郎と若連中の青年たちの芝居にかかる情熱によって、中沼、丘珠村、元村、石狩からも観衆が集まり、公演はますます本格化するようになりました。

素人芝居は大正時代に最盛期を迎え、十軒や丘珠の青年達も座員として参加するようになり、一時座員は50人にも増えました。

祭典奉納と地域の人々の娯楽・慰安行事として支持されていた「素人芝居」も、昭和の時代を迎えた頃から衰退してきました。

座員である青年たちが出征したり、札沼線開通などで娯楽の多い札幌中心部への人の流れがあったことなどです。

当時、篠路地区の集いの場として建築が進んで



花岡引退興行「侠客御所五郎蔵」の一場面



花岡引退興行「神靈矢口の渡」の一場面

いた「篠路共楽館」の落成を記念して、この“こけら落し”に「花岡義信一座」が公演することになりました（花岡義信は大沼三四郎の芸名）。

昭和9年11月22日、23日の2日間、「共楽館落成記念、札沼線開通奉祝記念、花岡義信一座引退興行」は華やかに、盛大に公演されました。2日間ともに会場に入りきれないほど大入り満員で大盛況のうちに終了しました。

こうして烈々布素人芝居は、33年間の歴史を残して終焉しました。

昭和60年10月、篠路コミュニティセンターが開館しました。この開館記念祝賀会に地域の有志が「白浪五人男」を公演し、大喝采をうけました。

この公演は「花岡義信一座引退興行」から数えて50年ぶりの復活となりました。この公演がきっかけとなって昭和61年12月に「篠路歌舞伎保存会」が発足しました。

大沼三四郎が、彼の情熱を傾けて築いた篠路歌舞伎は、昭和61年に篠路中央保育園の園児に引き継がれました。以来、「篠路子ども歌舞伎」として道内で多くの公演をしてきております。毎年10月に開催されている“篠路文化祭”の公演では、来場者から大きな声援と励ましをいただいております。

以来、子ども歌舞伎は平成27年1月の公演まで、実に篠路地域を拠点として28年間「篠路歌舞伎」の保存、伝承に貢献しています。

保存会は、昭和61年12月の結成以来、今年で



29年目を迎えました。

保存会の目的は札幌市民が誇れる貴重な伝統芸能としての「篠路歌舞伎」を保存伝承し、この活動を推進、支援することです。

具体的に記すと、

- ①篠路歌舞伎の伝承意義と、保存会の存在をPRし、市民の理解と支援を得る。
- ②篠路中央保育園の「子ども歌舞伎」の支援。
- ③協賛者を増やし、その理解と支援を求める。
- ④各種団体が主催する学習講座などにおいて講演できるように働きかける。26年は4ヶ所で講演を実施しました。



篠路シルバー水曜大学での講演活動

篠路歌舞伎保存会では会員を募集しています。
保存会は、本会の目的(篠路歌舞伎の保存伝承)に賛同する者をもって構成しています。
随時受付けていますので、次の所へご連絡下さい。

○お問い合わせ

会長(大高) 宅

TEL.011-771-1166

※ 年会費は 1,000 円です。



篠路文化祭での「篠路子ども歌舞伎」公演(白浪五人男「稲瀬川勢揃いの場」)